

# 服部文祥氏の講演を聴いて

裾野麗峰山の会  
諏訪部 豊

服部文祥氏の著作は2冊読んでいます。「サバイバル登山家」と「百年前の登山を旅する」だ。サバイバル登山は食料を可能な限り現地調達する登山だ。

百年前の登山は木暮理太郎、田部重治、ウェストン、上條嘉門次などの山行を当時の装備で再現したものだ。どちらも面白い発想の登山だ。サバイバル登山はピークに立つことが目的ではなく「いかにして食つなぐか」がテーマなので登山と言うより冒険と言った方が適切だろうか。ちなみに氏の本職は雑誌「岳人」の編集である。

その服部氏の講演は期待を裏切らない内容の濃いものだった。本を読んで知っていたとはいえスクリーンに投影される写真の数々は驚きの連続だった。氏の発想の原点はフリークライミングにあると言う。

現在のフリークライミングは最小限の道具しか使わない厳しいルールを自他に課している。しからばその「最小限の道具で登る」というルールを自分の登山全体に展開できないかと氏は考えた。

その結果厳選した最小限の道具だけを持って山に（谷に）入ることにした。最小限の道具とは鍋、食器、ライター、ナイフ、釣り道具そしてタープだ。ヘッドランプやラジオなど電気製品は排除し、夏場はシュラフもマットも持たない。

食料は米5合だけとし、他に塩、胡椒、味噌、醤油を持つことにした。その他の食料は全て現地調達することとした。現地調達の主力は岩魚だ。それを刺身や燻製にして食し、蛇やカエルの皮を剥いで食べる。もちろん山菜、キノコ、イチゴ、ブドウなども採取する。そうなるルートは当然沢筋ということになる。静岡での講演だからかどうか南アルプス（大井川水系）での写真が多かった。

「シマヘビとマムシは旨い。ヤマカガシは少し味が落ちる」とか「カエルには毒腺があるので皮を剥いたら良く水で洗う」など、とても我々の実践には役に立たない(?)だろうが、興味深い話ばかりだった。

氏はサバイバル登山を冬にも実践したくて猟師の門を叩いた。シカやイノシシを撃ち、解体する。「シカの脳みそは旨い」そうだ。動物を殺す時には罪悪感とも寂寥感ともつかない特殊な感情が心に現れるとのこと。

氏の姿は想像していたよりもずっと痩身だった。やせぎすと言っても良いくらいだ。彼の言によれば「夏場はもっと細くなります。その時の体脂肪率は数%でしょうね」とのこと。

こんな体格で10泊にも及ぶ厳冬期黒部川横断をよくもできたものだと驚い

た（これは食料持参登山）。氏の今後の登山はどんな方向に展開していくのか実に興味深い。

注

1. 氏は、現在47歳。3児の父。岳人編集は20年。1996年、K2（8611m）登頂。
2. 携帯電話は持たないという。飲酒は止めたそうです。
3. 講演は、2016. 11. 27 清水市・清水テルサにて。



講演会風景



左・服部 右・諏訪部



レセプション



左・後藤  
後藤は以前の岳人原稿  
で服部に感謝された